“全然”に関する国語学者浅野信の言語規範意識
－昭和 10 年代を中心に－

新野　直哉

1　はじめに

「“全然”は本来否定を伴う副詞である」という言語規範意識は、国語史上の客観的事実と反しており、「迷信」と呼ぶべきものであることは、現在では相当程度知られている。筆者は、この規範意識の発生時期はいつか、戦前にまで遡れるのか、という問題について考えるため、先行研究では注目されなかった、戦後を目前に控えた時期である昭和10年代（1935 ～ 1944）の国語学・国語教育・日本語教育の専門誌における“全然”の使用実態を調査し、当時のこの語に関する規範意識について考察した。その結果、占領地域への日本語普及という当時の国家的重要課題を念頭に置いた、「標準語」「正しい日本語」をめぐる記事・論文の中でも、“全然”に関する言及は見られず、その一方で今日では「誤用」とされるような“全然”が肯定を伴う例（以下「「“全然”＋肯定」の例」とする）が少なからず見られた。

この事実は新野・橋本・梅林・島田（2011）の一部として発表し、ここでは同時期の他の資料も調査したうえで

〔1〕戦後昭和20年代の後半に確認され、その後急速に浸透する「“全然”は本来否定を伴うべき副詞である」という規範意識は、その直前の時期である10年代にはまだ発生しておらず、当時のこの語の使用実態もそれを直後の時代に生み出すようなものではなかった。（187-188）

という結論にいたった。

この際調査した専門誌には、戦後も著名な国語学研究者として活躍した人物も多く執筆している。筆者はその一人である、戦後相模女子大・和洋女子大で教鞭をとった浅野信（1905 ～ 1984）の同時期の著書を調査した。

その結果、浅野（1935）および浅野（1943a）から、“全然”という語を取り上げてそれに関する言語規範意識を示した記述が得られた。このうち浅野（1935）は“全然”に関する先行文献では全く取り上げられておらず、浅野（1943a）も梅林（1995）が短く言及している程度である。しかし、いずれも戦前・戦中期に“全然”に関する何らかの言語規範意識を述べている以上、「“全然”＋肯定」を「誤用」とみなすという「迷信」の発生について考えるうえで無視できない重要な文献である。

そこで本稿では、〔1〕で述べた見解を検証する意味もこめて、両文献に現れた浅野の“全然”に関する言語規範意識について、同時期の他の著作も参照しつつ、考察する。

なお、本稿では新野（2011：117-123）で述べた基準に基づき、“全然”の被修飾

語の「否定」「肯定」については、

・否定―形容詞“ない”・助動詞“ない”“ず（ん）”・動詞“なくなる”“なくす”“なくなす”

・肯定―上記以外

とした。そして「肯定」をさらに以下のように5分類した。

A 否定の意の接頭辞として使われる漢字を含む語―“不可能”“無理”“未決”“否認”など

B 二つ以上の事物の差異を表す語―“逆”“別”“違う”“異なる”など

C 否定的な意味の語―“廃止”“停止”“解消”“取り除く”など

D マイナスの価値評価を表す語―“駄目”“失敗”“虚報”“的外れ”など

E 上記以外の、否定・マイナスの要素がない語

引用中の｛　｝内、下線は筆者による。傍点は形の違いを含め原文のママである。漢字は現行の字体に直した。

2　浅野（1935）に見られる意識

浅野（1935）は日本語における「匂韻」[1]の重要さを述べた本で、“全然”に関する記述は、「第二篇　単詞論　第一章　言語の作用――言語の社会性――」の「第一節　前説」にある。

〔2〕深い社会性を有つ言語と、それを有たない言語から受ける感じは、どれだけ言語作用の上に差隔を生ずるかといふことは、今まで種々説き及んだところであるが、更に又この警しむべき現象は、「美坊（みー）や、さう遊んでばかりゐないで少しは勉強しなさいよ」――「何言つてんのさ。お休みは遊ぶためにあるんでしよ。断然遊んぢやあわよ（ママ）」といふやうな父老と子女との問答に多く見られる。「全然このお菓子好きだわ」などと云はれたら、ほとほと当惑して了ふであらう。現今の言語のかういふ差隔と浮薄さは実に甚だしいものがある。同じ家庭にありながら父老と子女との用語が殆んど別個の感をいだかしめる醜さは悲しむべきことでなければならない。―これも同様社会性の有無にあるのだ。（51）

ここでは「全然このお菓子好きだわ」というセリフが、強く非難されている。それが“全然”が“好きだ”という肯定を伴っているためであるとすれば、今日まで続く「“全然”＋肯定」を「誤用」視する規範意識の現れた嚆矢であり、「迷信」の発生は戦前に遡れることになる。そのような意味できわめて注目すべき記述であり、なぜこのセリフが「ほとほと当惑して了ふ」ものなのかを明らかにする必要がある。

あるいは、「てよだわ」などと呼ばれ明治以来攻撃されてきた文末の「だわ」が非難の対象なのであろうか。この事象に浅野（1935）は全く言及していない。ここで、彼の2年前の著書である浅野（1933）を見てみると、

〔3〕女学生などには自ら接尾辞的、詠嘆的助辞が形成され、所謂「テヨダワ」「ノヨダワ」言葉を生むに至つた。我々はこゝに女人の感情的繊細性を見ることが出来るのである。又一面その脆弱的・社交的・感傷的性質をも随伴的に認められるのである。（6）

のように言及するものの、〔2〕のように強く非難する姿勢ではない。

したがって、非難の対象はやはり「全

然」である、と考えるべきである。

この時期、“全然”が否定・肯定両方を伴って使われていたことは先行研究から明らかであるが、浅野自身は、どのように使っていたのか[2)]。

まず、当の浅野（1935）中では、助動詞“ない”を伴う例が4例、動詞“なくなる”を伴う例が1例、さらにCの語を伴う例が次の3例である。

〔4〕「残る」とか「秋」とかいふ観念は全然掃拭されてゐるのである。（79）

〔5〕言語の詩性（感情性）は全然失はれて枯渇しきつてゐる（理智化技巧化）のである。（86）

〔6〕大目に見ても余りの六十語は当然訳語を以て代らるべきか、全然破棄せらるべきものかである。（170）

そしてもう1例、副詞“おほかた”の意味変化を論じる文中に、メタ言語としての例がある。

〔7〕「平家物語」に清盛の後白河法皇を幽閉し奉らむとしての言葉として

……大方院への御奉公思ひ切つたり。……

といふのがある。他これに類する例が随分あるが、而もそれらは尽く「全く」「全然」或は「まるつきり」の意をなすものばかりである。然るに現今にあつては「大方」は「大体」「略」「殆んど」の意味となつてそこに幾分の漏らすところ、除くところがあるのである。（114）

ここでは、“おほかた”の意味が古くは＜完全に＞であったものが現今では＜ほとんど＞になっている、という変化を述べている。そしてここに挙がっている『平家』の例の「大方」は「思ひ切つたり」という肯定を伴っている。つまりここでの「全然」は、肯定を伴うことのできる＜完全に＞の意の副詞の例として挙がっているのである。

また、浅野（1933）では、「第三篇　品種詳説　第四章　副詞」中の「三、副詞の紊乱（呼応）」で、“あに”“いはんや”“なんぞ”“けだし”等の副詞について、

〔8〕所謂再帰副副といはるべきものであつて、従つてその結びには明瞭に一定の規定があるのである。然し現今では幾分これらが歪められ、混乱させられて使はれてゐるやうである。（260）

とする。「再帰副副」は言うまでもなく「再帰副詞」の誤りで、今日いうところの「陳述副詞」に相当する。ここでは、その例として、「さつぱり……だめだ」「よもや……まい」「まさか……まい」「てんで……ない」が出ているが、“全然”は出ていない。

さらに、“一向”“断然”“とても”“まさか”を挙げて、

〔9〕これらの例は元来がその結びとして「否定語」「肯定語」を規定したものが、時代の動きに伴つて夫々その反対語を要求したものである。（262）

とし、“断然”については

〔10〕断然……元来否定的語、それが肯定的になつた。しかもかなり頽乱性をもつてゐる。（160）

〔11〕はじめ単に強調の辞であつた、それが否定語を伴つて「—…でない」となり、又現今では「—…だ」となり、単に「急に」等の意にまで下落した。（262）

とする。

さらに「断然愉快だ」「俄然腹がへつた」「果然試験だ」といった表現について

〔12〕殆んど言語の遊戯である。意味を用

ゐてゐるのではない。かうした強い激越な音声を喜び、この音声を吐露することによつて感情の消却を図つてゐるに過ぎない。（同）

と強く攻撃している。またほかの個所でも、当時のこれら「○然」という語構成の漢語副詞の用法を批判している[3)]。

〔13〕「俄然」・「断然」等の言語内容、「インチキ」等の音韻と、この語のもつ心理的意義、これらをとくと思うて見るがいゝ。人々は最早や言語の意義を第二義的に押下げて了つた。たゞかうした言語形式を追ひ、弄んで纔に自らを紛らしてゐるにすぎないのである。（8）

〔14〕「俄然」「断然」「果然」は現在人の焦燥積鬱を、「モチ」は軽浮を、「トタンに」は頽廃を夫々物語るものである。前進なき者はあらぬ道草を喰ひ淫蕩に陥る。我等はこの心理的言語にこの理を見ることが出来る。で前三者は殆んどその言語内容を正当に顧慮することなしに、その一時的につよく破裂する音を弄ぶ気持で使用せられるのである。「俄然腹がへりやがつた」、「断然飯くはう」、「果然うんまい」といった調子である。だがこれらは善い方である。「断然テニスをしよう」、「断然つかれた」といふ乱用ぶりである。（44）

しかし、やはり“全然”はまったく取り上げられてない。

それではこの浅野（1933）内の“全然”はどうか。形容詞“ない”を伴う1例、助動詞“ない”を伴う2例に加え、次のような例がある。

〔15〕「結構」といふ語がある。これは表面上甚だ「結構」な意を表すものだが、習慣心理の顚倒から「沢山」ですの意に転化してゐる。言語の形式と内容とに就いては当時必ずしも全然一致するものではないことを思うて見なければならないのである。（67-68）

この例における「全然」は、前に「必ずしも」があるので、明らかに「ない」ではなくEの「一致する」を修飾している。この例は浅野にとり規範に外れるものでなかったとなると、同じくEの語を伴う「全然このお菓子好きだわ」とはどこが違うのか。

前掲の、浅野（1933）における“断然”に対する意識を再度見てみると、「否定語」から「肯定語」へ、という呼応の変化については〔9〕～〔11〕のように冷静かつ概ね客観的に記述しているのに対し、〔12〕～〔14〕では、本来の「意味」「言語内容」を失い、単に「強い激越な音声を喜び」「一時的につよく破裂する音を弄ぶ気持で使用」するという変化について、感情的と言っていい激しい口調で攻撃している。

そして、〔14〕で批判されている「断然飯くはう」「断然テニスをしよう」と同趣の例である「断然遊んぢやあわよ」とともに、2年後の〔2〕で、「全然このお菓子好きだわ」を「社会性を持たない言語」として強く非難している。ここで言う「社会性」とは何か。

浅野は〔2〕の直前で、「最近公用語ともいふべきものゝ変改が行はれた」として“かふゑー”→“会館”、“女給”→“従業婦”、“監獄”→“刑務所”、“小僧”→“小店員”といった例を挙げ、その理由を次のように述べる。

〔16〕従来の称呼では深刻にすぎるとい

ふところから出てゐるものであらう。然らばこの深刻にすぎるとは如何なる意味であらうか。それはあまりにこれらの語に習熟すぎて、その意義と感情の強烈さに堪へないことに外ならないのである。つまり言語形式を変改することによつて、従来持つてゐた感情の消却と、これに伴ふ意義の転換とを図つたもの、一言にして云へば社会意識を新にするためにしたことに外ならないのである。（歴史的社会性――意義と感情＝匂韻――の没却）

既に社会性（歴史的）を失つて、かく変改された語は、浅い意義しか持たない――感情性がない――従つて新語としてしか我々に響いて来ないのである。ために従来の語のもつてゐた「匂韻」の被蔑視性・被賤視性・被憎視性を掻き捨てゝ、全然かうした性情をもたない単純な意義のみをもつた語として、吾々に見えることが出来るのである。この点この方面に於ける成功を見たのである。しかし、これとても相当の年月を経れば亦同じことになつて了ふ。（49-50）

ある職業の呼び名が“女給”・“小僧”から“従業婦”・“小店員”と変わっても、その実態が大きく変わるわけではない。しかし、前者にある「被蔑視性・被賤視性・被憎視性」が、新語である後者にはない。つまり、「単純な意義」だけでなく、その語が社会の中で使われているうちに帯びるようになった語感やイメージといったもの（「感情＝匂韻」）をも含んだ概念が、ここで言う「社会性」ということになる。そして「単詞論」の中にあるこの個所で話題になっているのはあくまで単語自体の「社会性」で、その文中での呼応については、同書の「第三篇　文章論第二章　呼応論」という別の篇の中の「二、副詞の呼応」で論じられている。そこでは、否定と呼応する副詞として「少しも……ない」「ちつとも……ない」「一向……ない」「必ずしも……ない」などが挙がっているものの、「全然……ない」は挙がっていない（282-283）。

ということは、〔2〕で「全然このお菓子好きだわ」に「ほとほと当惑して了ふ」のも、この「子女」のセリフの中の「全然」が、「断然遊んぢやあわよ」の「断然」同様に、本来この副詞が持っていた＜完全に。何から何まで＞という「意味」「言語内容」を失って単に「強い激越な音声を喜び」「一時的につよく破裂する音を弄ぶ気持で使用せられ」るという、「父老」の世代から受け継ぐべき「社会性（歴史的）」を無視したものになっているから、と考えるべきである。それに対し〔15〕の「必ずしも全然一致するものではない」の「全然」は、＜完全に。何から何まで＞という本来の「意味」「言語内容」であり、語としての「社会性（歴史的）」を維持しているので、浅野の規範からは外れていない例となるのである。

この事実と、〔7〕で肯定を伴う「大方」の言い換え語となっていることを考え合わせると、浅野（1935）の時点での“全然”の正誤を判断する基準は、否定を伴うか肯定を伴うかではなく、あくまで「社会性の有無」、すなわち本来の「意味」「言語内容」で使われているか否か、ということになるのである。したがって〔2〕の下線部は、「“全然”＋肯定」を「誤用」視する言語規範意識の現れと考えるべきでは

ない。

ただ、「全然このお菓子好きだわ」が、例えば「あのお菓子とこのお菓子、どっちが好き？」という問いへの答であれば、＜100％、全く疑問の余地なくこのお菓子が好きだわ＞ということであり、「社会性（歴史的）」を失っているとはいえない。今日における「“全然”＋肯定」を考える場合と同様、使われた場面や文脈の検討が必要である。

3　浅野（1943a）に見られる意識

浅野（1943a）は「俗語」を標準語・流行語・新語・古語・外来語すべてを「抱擁し」た「真実に世人の間に生きる一般言語」(4) とする。そして「第三章　細説〔一〕感情と言語（Ⅰ）」で、「下に否定の語を必ず将来せしめる筈のものであつた」“とても”が「単なる強調の詞」となった例を挙げたのち、以下のように述べる。

〔17〕「とても」が余りにその一語に感情の凝集が甚だしかつたために、その呼応性を振り棄てたのと反対に「決して」が下に否定の語を呼応せしめるに至つたことは面白い現象である。

今日では「決して」は例外なく下に否定の語を応ぜしめて

(7) 途中でどのやうなことがあらうと、決して帰つて来ないやうなことはありません。

となるが、少くとも明治以前は

(8) さて此書き様筆法に斯く作りし気象がうつれば、決して通円が真筆なり

—「腋下幽人・茶道秘録」

の如きものがその本体であつたのである。今日これらの中間にあるものが「全然」であり「断然」である。これらは、前記語の否定語に対して、半ば消極語をも取るのである。（「全然」以外の下線（原文は縦書きなので傍線）ママ。 40-41）

ここでは、浅野（1935）とは異なり、意味ではなく、副詞の呼応について述べる中で、“全然”の呼応にも言及している。現在確認されている限りにおいて、“全然”の呼応に関する意識が直接示された嚆矢であり、したがって、「迷信」の発生について考えるうえで重要な記述である。

ここで浅野の言う「否定語」は、この個所の記述、および

〔18〕これらの語群の中、特に著しいのは、否定語を添加せしめてその情感の快適を表出しようとする語類である。主として形容詞乃至形容詞性語類に「ず」（文語）「ない」（口語）等を附随せしめたものどもなのである。「勿体ない」や「負けず嫌ひ」等の代表する三四十種類の語群を見よ。(42)

〔19〕而もその最上に達した最上の情意を表出するのに「ない」（文語「ず」）の如き否定語を添へるのが「勿体ない」「だらしない」や「怪しからず」「斜ならず」等の語類である。(46)

といった記述から、否定の助動詞“ない”“ず”および形容詞“ない”を指すのは確かである。

それでは「消極語」とは具体的にどのような語を指すのか。梅林（1995:38）は、〔17〕について

〔20〕「消極語をも取る」という記述から、「全然」が、打ち消しの語だけを求めていたわけではないということもわかる。すなわち、「全然冷淡だ」「全然別だ」などの「全然……否定的」も許容範

囲にあったと考えられるわけで、「全然」の呼応に関しては、幅のあるゆるやかなものと見られていた様子がうかがえる。

そして、「消極語をも取る」とあえて記されている点からすると、この時期に、＜「全然……否定的」は規範的でない＞という意識は、まだ存在していないと考えられる。

とする。梅林（1995）の中で「否定的」とする語は、新野（2011）におけるA～Dにほぼ一致する。それが浅野の言う「消極語」に該当するというわけであるが、それが妥当かどうか検証する要がある。

しかし「消極語」という語は浅野（1943a）にはほかの例がない。ここで同年の著作である浅野（1943b）を見てみる。同書は「文法辞典」と銘打っているが、文法概説の部分と、品詞別国語辞典というべき部分とから成っており、以下のような例が得られた。

〔21〕「なんて」は｛中略｝下に来る述語は大方否定か乃至は消極的なものかである。「……なんて――いけない」とか「……なんて――だめだ」といふやうに。（58）

ここでは「消極的なもの」の例として「だめだ」を挙げている。しかし、他の個所では

〔22〕｛“いつかう（一向）”は｝「さつぱり」「ちつとも」などにあたり、多く下に「だめだ」とか「ない」とかの否定的の語が来る。（554）

〔23〕｛“たうてい（到底）”は｝現在では下文に「だめだ」「…ない」などの否定の語を伴ふに至つてゐる。（574）

と、「だめだ」が「否定的の語」「否定の語」に含まれている。浅野自身、この点は判断がゆれていたと思われる。「全然だめだ」は、戦後の「迷信」信奉者においても、「“だめ”は形は肯定でも意味は否定」という理由で、「誤用」視はされない。

次に、当の浅野（1943a）で“全然”がどう使われているかを見てみよう。助動詞“ない”を伴う1例のほか、〔17〕の直前で

〔24〕又これらとは全然別個のものであらうといふことにもなつたのである。（39）

というBの例、さらに別の個所で

〔25〕動詞・形容詞が吾が国にとり入れられるときは、その外語に於ける活用（語尾変化）は全然無視され没却されて、全くの和語としての扱を受ける。（126）

というAの例がある。

そして浅野（1935）同様、副詞“おほかた”について論じる中に、メタ言語としての例がある。

〔26〕また今日標準語となつてゐる「大方」が中世期までは「全然」「全く」「きつぱり」「さつぱり」などの意であつたことは、その過渡期たる平安末期から鎌倉・室町期へかけての作品（大鏡・平家物語・徒然草等）を検討すれば、自ら了解せられるところ、而もその盛期には、その下に否定・肯定両様の語を応じさせてもゐたのであるが、今日では全く推定・想像の意の「だらう」が応ずるだけになつてゐる。（37）

ここでは「中世期までは「全然」｛中略｝の意であつた」とする。そしてその呼応については「否定・肯定両様の語」であったとし、〔7〕同様、「否定を伴う副詞

であった」とはしていない。

次いで浅野（1943b）も見てみる。同書の品詞別国語辞典部分における収録語の選択基準は明確でなく、副詞の中に“全然”は立項されていない。しかし他の語の語釈の中で、＜完全に、何から何まで＞の意を表すメタ言語として使われている。

〔27〕{“ずぶ”は}「ずぶ生」などと用ゐて「全然」、「全く」などの意に用ゐる。（429）

〔28〕{“おほかた”は} 昔は「全く」「全然」「きつぱり」の意であつたが、今では十の中七八を指して大体、大抵、多分などの凡そを推定する意に用ゐてゐる。（557）

〔29〕{“かいもく（皆目）”は} 別に「さつぱり」「全然」「少しも」等に当り、下に必ず否定の語の「ない」が来る。（558-559）

〔30〕{“からきし”は}「全然」（だめだ）「さつぱり」（○○でない）の意。「まるで」「ちつとも」「一向に」などいふ他の副詞に当る。下には必ず否定の語を呼応させる。（560）

〔31〕{“さつぱり”は}「少しも」「全然」などに通じ、必ず下に「ない」の否定語を伴ふ。（566）

〔29〕以下の記述からは、“全然”も必ず「否定語」（“だめ”も含む）を伴う副詞であると考えていたようにもとれるが、メタ言語として以外では、同書でも否定を伴う9例（形容詞“ない”4例、助動詞“ない”3例、同“ず”2例）に加え、A（〔32〕）・B（〔33〕～〔35〕など9例）に当る語を伴っている。

〔32〕「なんか」は全然それらのものを無視し問題にしないところに、この卑称の意が生ずるのであらう。（57）

〔33〕これは全然別詞となるので初歩的には注意を要するといふことは既に説いた通りである。（124）

〔34〕これは自動詞の受身の相で、全然前條の受身と趣を異にする。（151）

〔35〕物事が正しくあるべきすがたとは全然反対にあるのをいふ。（290）

さらに、前年の著作浅野（1942）では、“全然”そのものについての記述はなく、やはり“おほかた”について

〔36〕{“おほかた”は}もとの意としては、「全然」「まつたく」に近く意味が強かつた、それが鎌倉以後「大体」「ほゞ」「おほかた」等と随分弱くなつた。（174）

というメタ言語の例があるほかは、助動詞“ず”を伴う例とCの語を伴う例が1例ずつあるのみである。

また浅野が昭和10年代に学術誌『コトバ』（その書誌については新野・橋本・梅林・島田（2011：184）参照）に8本、『国学院雑誌』に9本発表した論文・書評等においては、前者ではBの語を伴う例が4例、Cの語を伴う例が2例、後者では助動詞“ず”・同“ない”・Aの語を伴う例が1例ずつである。

これらの結果から、1943年当時の浅野にとっては、“全然”が否定に加えA～Dの語を伴う例が規範に外れたものでなかったことは明らかである。そして〔17〕では“全然”が「半ば消極語をも取る」ことを批判的には見ていない。したがって、梅林（1995）にあるとおり、〔17〕の「消極語」とは「否定的」すなわちA～Dに分類される語（ただし“だめ”の所属が「否

定語」か「消極語」かは、浅野の中でゆれている）と考えてよいであろう。

そうなると当時浅野は、「否定語」でも「消極語」でもない語、つまりEの語を伴うことは認めていなかったということになる。しかし、浅野（1943b）には次のような例もある。

〔37〕{“いいや”は}「いいえ」に近いが、「いいえ」の全然対者に対していふのに比して、これは、自分で云ひ又は考へたことを打ち消すにもいふのである。（598-599）

ここでは「全然」は「いふ」を修飾している。“云う”は否定やマイナスの要素のない語であるが、プラス評価の語でもない。当時の浅野は、Eのうち少なくともこのような語を伴うことは認めていたとみなすことができる。

4 おわりに

以上見てきた、浅野の“全然”に関する昭和10年代の言語規範意識は、次のようにまとめられる。

- 浅野（1935）時点――呼応についての直接の記述はなく、実例から判断すると否定に加え肯定のA～Eを伴う例も認める。ただし、「社会性」のない使い方、すなわち＜完全に。何から何まで＞という本来の意味を失った使い方は認めない。
- 浅野（1943a）時点――意味についての直接の記述はないが、＜完全に、何から何まで＞の意を表すメタ言語として使っている。呼応については、否定とA～Dに属する語を伴うことを認める。Eのうちでも少なくともプラス評価に関わらない語を伴うことは認めていると考えられる。

戦後の「迷信」は、“全然”がEはもちろんA～Dの語のうち“違う”“だめ”など（個人差あり）を除く大部分の語を伴うことを「誤用」視するもので、それと比べると浅野（1943a）の許容範囲は相当広い。しかし、“全然”の呼応に関する規範意識なのは間違いなく、戦後、「迷信」に成長していく萌芽と呼べるものである。

ただし10年代においてそのような意識が社会に浸透してはいなかったことは、新野・橋本・梅林・島田（2011）の研究成果――10年代の学術誌を含む文献にEのうち積極的なプラス評価の語を伴う用例も依然見られ、そのような用法を「誤用」視する記述が見られないこと――から判断できる。そして、浅野のこの時期の肯定を伴う例も、〔15〕・〔37〕をはじめその多くが、戦後の「迷信」信奉者からは「誤用」の烙印を捺されるであろうものである。

以上から、冒頭に〔1〕として挙げた新野・橋本・梅林・島田（2011）での結論は、本稿においても修正する必要はない、ということになるのである。

注

1)「匂韻」とは、同書の「序」では「語の所謂「体」の奥に秘められてゐる幽玄霊妙な「連想」至乃（ママ）「生動」（こゝに各語の個真性がある）の機能を構成してゐるもの」(3) と定義されているが、ほかにも何個所かで異なった文言で定義がなされており、なかなか厳密な意味を把握しにくい概念である。結局それぞれの個所での具体例による説明から、それぞれの個所での意味を考えるしか

ない。

2) 研究者の、ある事象に関する言語規範意識と、その実際の使い方とは必ずしも一致しない。井上史雄は、自分では「ら抜き言葉」を使っていないつもりだったのに、自分の講義のビデオテープを見たら「見れる」とはっきり言っていた、という体験談を述べている（井上1998：30）。

　しかし、この井上のケースは講義とはいえ口頭語であり、今回の調査対象は文章語、しかも日本語関係の学術的文章の言語であるから、言語規範を守ることは特に念頭に置かれていたはずである。

3) ここで“断然”とともに槍玉に挙がっている“俄然”については、今日の「若者語」においても同じような用法の存在が指摘されている。

〔38〕彼｛＝「ある学生」｝は「当然」というような意味で「がぜん行くでしょ」などとふだんよく使っているのだが、ある時、本来の意味とは違っていると感じたのだという。｛中略｝同年代は「がぜんやる気が出た」としては使うと声を揃える。そのために、使用される文脈と語の発音の勢いとが醸し出すイメージに基づいて生じた用法のようだ。「がぜんイチゴよりリンゴ」と「断然」の代わりに使う女子学生もいた。｛中略｝「ガッと飛びつく」の「ガッと」というオノマトペのような副詞の働きをする語との関連も考えられる。当然の意味で一言、「がぜん」と強い響きを求めて仲間と使う中学生もいた。（笹原2011：35-36）

参考文献

浅野信（1933）『巷間の言語省察』中文館書店

浅野信（1935）『国語の匂ひと韻』大岡山書店

浅野信（1942）『日本文法辞典　文語篇』八弘書店

浅野信（1943a）『俗語の考察』三省堂

浅野信（1943b）『日本文法辞典　口語篇』八弘書店

井上史雄（1998）『日本語ウォッチング』岩波書店

梅林博人（1995）「「全然」の用法に関する規範意識について」『人文学報』266:35-53。東京都立大学人文学部

笹原宏之（2011）『Word-Wise Book　漢字の現在―リアルな文字生活と日本語』三省堂

新野直哉（2011）「「“全然”＋肯定」をめぐる研究」『現代日本語における進行中の変化の研究―「誤用」「気づかない変化」を中心に』111-215。ひつじ書房

新野直哉・橋本行洋・梅林博人・島田泰子（2011）「言語の規範意識と使用実態―副詞“全然”の「迷信」をめぐって」『日本語学会2011年度秋季大会予稿集』183-188。日本語学会

付記

本論文は、国立国語研究所の共同研究プロジェクト『近現代日本語における新語・新用法の研究』による研究成果の一部である。

（国立国語研究所）